

図書館だより

Bulletin of the Hokkai Gakuen University Library

詩聖ゲーテ 63歳と楽聖ベートーベン 42歳が出会った

1812年、ボヘミアの夏

O Tannenbaum!
O Tannenbaum!

へ もみの木!
もみの木!
とわに緑よ
雲とぶ夏にも
雪つむ冬にも
もみの木!
もみの木!
とわに緑よ

(ドイツ民謡「樅の木」堀内明訳詩)

もみの木は平和の象徴だ。
仰ぎみれば心が軽くなる。
ゲーテは夏になると、
ワイマールを離れ、もみの木の繁る
ボヘミアの温泉地めぐりをすることを常
としていた。
いわく、テプリッツ。
いわく、マリエンバート。
その中でも、
カルルスバートは
ゲーテのお気に入りだった。
バート Bad とは
英語では bath、
つまり温泉の意なのだ。

書彩生彩



1812年、夏、耳の病の治療のために、
ここにもう一人の天才が訪れていた。
「不滅の恋人」を追っていた、
42歳のベートーベン、その人である。
詩聖と楽聖の出会いはいしかし、
不幸な結末となった。
皇族一行のなかへ、荒々しくも、
ベートーベンがゲーテを引いて突入した
からだ。いたく傷ついたゲーテは、その後
ベートーベンと会うことはなかった。
(関連読物 p.7-8)

- p.2. 水の話(3) (余湖典昭) ■ p.3. 講壇余滴(2) (後藤啓一) ■ p.4-5. 気楽に読もう
- p.5. 大学院博士課程受入学位論文一覧 ■ p.8. 「もう一つの真実」を読もう (K.K.)

水の話 (3)

湯水のように

余 湖 典 昭

「湯水のように使う」とは、お金を惜しげもなく使うことを言う。ここで「湯水」とは、「周囲にいくらでもあるもの」を意味している。つまり、日本人にとって水は簡単に手に入るものだった。

水道法によれば、水道の目的は「清浄にして豊富低廉な水の供給を図り云々」とある。要するに、蛇口をひねればタダ同然の美味しい飲み水が、いつでもジャンジャン出てくるのが水道なのである。世界を見渡すと、「水道水＝飲料水」である国は必ずしも多くないが、日本では法律で決められているのだから、有無を言わず「水道水＝飲料水」でなければならない。したがって、水道事業の関係者は法律を遵守すべく必死の努力を続けている。にもかかわらず、市民からは「水がまずい」、「臭いがする」、「赤さびが出た」などと言いたい放題である。おまけに水道事業は独立採算であるから、高度な浄水処理を行おうとすればその経費は水道料金に跳ね返るため、また文句を言われてしまう。

世の中に安くて美味しいものは滅多にあるものではない。安くて美味しい店は、たいがい小さな店で常連だけでいつも満席になっている。マスターが色気を出して、店を拡張すると確実に味は落ちる。だが、水に限っては、安くて美味しい水を全国民に供給しなければならないのだから水道事業とは大変な商売である。

「日本は雨が多いのだから水は安くて当然だ」と思いがちである。特に今年の夏は日本列島を豪雨が襲い、氾濫した水をたくさん見せられた。確かに日本は年間 1700 mm 以上の雨が降り、世界でも有数の多雨国である。しかし、一人当たりの降水量（雨量×面積÷人口）を計算すると、一気に順位は下位に転落する。さらに、地形が急峻なため降った雨は直に海に流れ出てしまい、利用するには甚だ効率が悪い。雨は多いが水資源に恵まれていないのが日本である。

主婦に「お宅ではどのくらい水道水を使っていますか？」とたずねれば、おそらく8割方は「〇千円くらい」と料金で答えるに違いない。「節水キャンペーン」を一所懸命行っても、市民には使用水量に対する認識が薄く、もっぱら家計に占める割合を気にする。したがって、市民はよほど料金が高くないかぎり、文字通り「湯水のように」使う。せっかく浄化した水にわざわざ入浴剤を入れて風呂に入り、パンツを洗い、ウンコ・オシッコを流し、朝シャンをし、車を洗い、庭にもまいて、一人で一日に 200ℓも使ってしまう。「水がまずいと」文句を言っておきながら、飲む水はホンの僅かである。

私が水道局の職員だったら、「苦勞しておいしい水を作っているのに、何たること！」と、ユーザーの勝手さに腹を立てるが、お客様は神サマであり、法律に逆らうわけにもいかず、グッとこらえなければならない。ちなみに、お客さんをしかり飛ばしても首にならないのは、大学の先生だけである。

生命の維持に最も大切な飲料水がガソリンよりはるかに安いのは、考えてみれば不思議なことである。リッター〇円と看板を立ててスタンドでも販売したら、市民の意識も少しは変わるかも知れない。

東京在住の知人の「もう何年も水道の水を直接飲んだことがない」との話聞き驚いたことがある。ミネラルウォーターが猛烈に売れており、水道管のない高級水道が着実に普及しつつある。日本の水道が「清浄、豊富、低廉」の3要素を堅持し続けることは難しいが、ではどの要素を放棄するのかは議論の分かれるところである。いずれにせよ、将来「湯水のように使う」は死語になるに違いない。かわって、「大学に進学させるように使う」と言うのはどうだろう？

（よご のりあき 工学部土木工学科教授）

色感異常 — 心のゆとりと色を考える —

後藤 啓一

人間は色を象徴化して表現する才能をもっている。たとえば、「白」は潔白、純潔を表し、「赤」は喜悦、情熱、活気……といった具合に象徴化する。これは色がわれわれ人間の感情に明らかにある種の影響を与えていることを物語ってくれる。

朝起きて窓を開ける — 晴れた日、さわやかな外気と青い空に思わず大きく背伸びをして、そのすがすがしさを満喫したり、あるいは反対に、いまにも降りそうな曇り空を見ては、暗い気持ちにおそわれたりする。

季節の移り変わりにともなう色の変化は、人間の心に豊かな広がりを与えてくれる。そして人間は、この色にさまざまな感情を与えて日々の暮らしを巧みに演出する。

人間に感情的効果を与える色の要素として、明度・彩度などがあることはご存知の通り。

明度の高低は「快と不快」の感情を生み、また、彩度の高低は「おちつきとくつろぎ」の感情を呼びおこす。カラー・コンディショニング（色彩調節）は、いまや、オフィスや工場の安全管理にとっては常識になってしまったが、かならずといってよいくらい、緑系統の色の壁にお目にかかる。

それというのも、緑色が「平静」という感情的効果を生むからである。幼稚園とか、小学校低学年の教室などのように“楽しさ”を優先させたい環境では、たとえば、ピンク系を多用し、躍動的な効果を狙う。

このようにある色の存在が、われわれにある感情をおこさせることから、積極的に心情を色に託して表現する。

結婚式やパーティーの時には、華やかな衣服をまとい、悲しみの席には黒い衣服を身につける。

このように人間の色に対する感情をもとにして作られたのが「色彩象徴による性格検査」である。

色彩の象徴化と心の健康について調べていくうちに、意外なことに気づいた。いわば“色感異常”とでもいいようになるような奇妙な表現があることである。

たとえば「真っ赤なウソ」という表現があるかと思えば「赤誠」という表現もある。つまり、“ウソとマコト”を同じ色で表現する。英語ではウソのことは「白い」色になっている。友人のハワード・ターノフ先生（北海道医療大学英語教授）とこのことについて話しているうちに、これまた、日本語と英語では色についてかなり相違があることがわかった。

たとえば日本語では「青い顔」が、英語では「白い顔」になるという。そういえば「青色吐息」という表現も面白い。顔が青くなれば、吐く息も青く見えるのであろうか。

中国人の色彩感覚にも奇妙な表現がある。中国は元來が文字の国だから、凝った表現を用いる。

たとえば、赤には「何もない、空っぽ」の意味があることから、「赤貧潰しが如し」となる。

中国人の言語感覚だと貧乏の色が赤いのか、といたくなるが、そんな単純なものではないようだ。

しかし、中国人の感覚には赤が「何もない」と結びつくのだろうが、たとえば「紅涙をしぼる」といったり、忙しい時に流す汗を「朱汗」というのはどういうことなのだろう。

「紅涙をしぼる」はいかにも美人の流す涙を連想して興味深い。

赤がでたから白を探してみた。「白猫」というのは実は黒猫のことだそう。わが国には「白書」がずいぶんと出回っているが、これは白々しいウソを並べた報告書ではなく、この場合の白は色でなく、「申し上げる」という動詞だという。中国人に対して欧米人の色彩感覚もすぐれているといわれているが、合理的な民族だから、中国人ほどの跳躍はないようである。

しかし、この種の面白い表現はある。恐ろしい剣幕のことを「黒い顔つき」という。白人がいくら血相を変えたからといっても黒くなることはないと思うのだが……。

ドイツ人は合理的な民族といわれるが、ドイツでは怒った顔を「緑と黄になる」という。七面鳥ならばともかく、人間がそんなに器用に顔色を変えられるはずがない。ターノフ先生曰く。“英語の「緑の目」という表現は、いかにもイキイキとした目のように響くのだが、実は「嫉妬」のことなのだ”嫉妬に狂うと、口が緑色に輝くらしい。

白いものを黒いといったり、形のないものに色を与えて、「青い破滅」とか、「白い恐怖」のようにムードを匂わして色を象徴化する人間の能力は実に絶妙である。人間のもつ創造力のほとばしりともいえる。

色が無秩序に氾濫している今、心に広がりを与えてくれる“色のニュアンス”を味わってみるのも心の健康維持のひとつではなかろうか。

(ごとう けいいち 経済学部教授)

気楽に読もう！

「カモメに飛ぶことを教えた猫」 セブルベダ、ルイス著（白水社）



舞台はドイツの港町ハンブルグ。主人公は太った真っ黒な猫ゾルバ。ある日ゾルバが日光浴をしていたところへ、瀕死のカモメが空から落ちてきました。海に流れ出た原油に、羽をやられてしまったのです。カモメは消え入りそうな声で、ゾルバに三つの願いを託します。「どうか、私が産む卵は食べないと約束してください。そしてひなが産まれるまで、その卵のめんどろを見てください。最後に、ひなに飛ぶことを教えてやると、約束してください。」猫のゾルバが誓った三つの約束、でもその約束をまもるには、大いなる知恵とまわりのみんなの協力が必要でした……。

シンプルで楽しい物語を読みながら、勝手に海を汚して平気である人間に腹がたち猫やカモメやほかの生き物たちに謝りたい心境になりました。寓話のかたちを借りたこの物語は、私にたくさんの事を考えさせました。現代を生きる人間に奢り

はないか。民族や宗教や文化の違いを越えて「異なる者どうし」は、心を通わせることが可能か。etc.etc.

猫好きな人だけじゃなく、大人にも子供にもたくさんの人にぜひ読んでもらいたい本です。挿絵もとっても可愛いです。（T. M.）

「大学時代しなければならない50のこと」 中谷彰宏著（ダイヤモンド社）



タイトルを見て興味がわき、本をパラパラめくってみた。短大を卒業して10年になるが、私は「しなければならない50のこと」をちゃんとしたのだろうか。

結果、全然していなかった！

最初に、箇条書きで「しなければならない50のこと」が載っている。私は指を折って数える準備をするが、ほとんど指が折らさなかった。

大学時代に、しておかなければならないのは、

北海学園大学大学院

博士課程受入 学位論文一覧

「第2の自分」が目覚ます事だと言っている。多重人格みたいだが、まずはそうらしい。

そして、たった1つ、「こいつはすごい」という人に会えと言っている。私は残念ながら、出会えなかった。だから、今の私なのである。

中谷さんは、学生時代、映画監督になりたかったらしく、「質より量」だと考え、ピカソも天才と言われるのは、作品が8万点もあるからで、映画を観ていないと始まらないと思い、月に100本を目標として、4年間で4800本を観た。今と違い、ビデオがなかったので、「ぴあ」でスケジュールを組み、はしごする映画館の移動時間や予告編の時間を予想し、本編だけを観れるように行動した。そのおかげで、「スケジュール管理能力」がついたそうだ。

100本の映画を観ることよりは、10回繰り返して観ることのできる映画に出会うことの方が大事でたった10本しか観ていなくて、10回繰り返して観ることができる作品に出会うことは、難しい。食わず嫌いの作品のなかに、宝物になる作品があるかもしれないので、たくさん観ようと言っている。

この本は、中谷さんの大学時代の映画の話の例に取っているが、全ての物事にあてはまり、興味深い1冊だった。

卒業までにやりたい事が見つければ、夢は実現する。充実した大学生活を送って下さい。

(Y. S.)



1. アメリカにおける看護婦の法的責任
— 看護婦実務法の発展と
医療事故判例の分析 —
良村貞子／法学研究科法律学専攻
2. ドイツ第二帝政期の反ユダヤ主義政党の消長
— ドイツ社会改革党 (Deutschsoziale
Reformpartei) を中心に —
大場崇代／法学研究科法律学専攻
3. 法例以前の国際私法—渉外的私法規範に関する一考察
— 英米の領事裁判例を中心として —
谷口牧子／法学研究科法律学専攻
4. 三次元有限要素法を用いたヒト下腿骨内応力
解析とそれによる人工膝関節頸骨コンポーネ
ント形状の評価
古澤正三／工学研究科電子情報工学専攻
5. 寒冷地向けヒートポンプシステムに関する研究
田村 勇／工学研究科建設工学専攻
6. 対象の特徴を考慮した画像認識の研究
高柳 浩／工学研究科電子情報工学専攻

三つ子の魂が見た 野なかのミステリー

理論は灰色で、
緑なのは生の黄金の木だけ

○ Tannenbaum /

○ Tannenbaum /

へ もみの木！
もみの木！
なつかしの木よ
イエスの祝いに
光輝きし
もみの木！
もみの木！
なつかしの木よ

もみの木はメルヘンの象徴だ。
その森からは子供たちの
不思議の角笛が聞こえてくる。

子供の頃見た
人形劇が、
詩聖の心に深く刻まれていた。
『ファウスト博士』だった。

24年間の契約で、
悪魔を従えるが、
そのあとは悪魔の従者となる物語。
とりわけ、
ゲーテの心を占めたのは
古代ギリシャの大きな戦争、あの

文豪知求紀行

— 続・戦争と平和の世紀みつめて

③

ドイツ・ゲーテ

『イーリアス』に描かれた一人の美女、
ヘーレナの姿だった。
彼女こそ、
詩聖が野の中に見た
ミステリーだったろう。

はじめに、『ファウスト』を貫く
構想があった。
25歳から死の83歳までの間、
ゲーテは少しずつ、書きつづけた。
『ファウスト第1部』の完成は
57歳、1806年のことである。
これにほぼ30年の歳月を費やした。

それから20年の中断があり、
再び『ファウスト第2部』に取りかかったのは
75歳。1824年。

そこからゲーテの急峻な山登りがはじまる。
幼少期に見た人形劇からほぼ全生涯を『ファウ
スト』に打ち込めたのは、ゲーテがベートーベン
のような芸術家とは違って、「社会的義務」を分母
として、芸術を分子とした生活戦略を建てていた
からだろう。

1812年、63歳のゲーテはその峰の中腹にいた。
この冬、ナポレオンはロシアで大敗して、もみ
の木のボヘミアを命からがら通って行く。

幾度となく
青春を繰返して
登りつめた

魂のマッターホルン

○ Tannenbaum!

○ Tannenbaum!

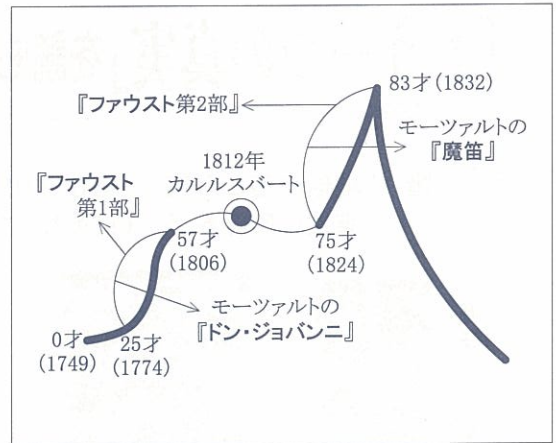
へ もみの木!
もみの木!
緑さやけき
望みの力の
あふるる姿よ
もみの木!
もみの木!
緑さやけき

もみの木は忍耐の象徴だ。
ゲーテも忍耐の人である。

ワイマールの冬は
音楽の季節である。
宮廷音楽監督だったゲーテ。
その出しものはいつも、彼が愛してやまない
モーツァルトの作品。
とりわけ、
『ドン・ジョバンニ』と
『魔笛』だった。

この二作品こそ
実は、ゲーテの『ファウスト』と相似形をなし
ている。

「第1部」は『ドン・ジョバンニ』が、



「第2部」は『魔笛』が対応していた。

ある時、
ゲーテは大公の愛人だった、
プリマドンナに注文をつけたことがある。
その時、返って来た言葉は、

「そうです!
よろしいですわ!
あなたのあのお美しい
妹さんか、
奥様にでも替っていただきましょうかしら!
でも、天は二物を
お与えにはならなかったんですものね。
神様は
なんと公平なんでしょう!」

ゲーテの体は熱くなり、
体から汗がふき出した。
妹は精神病を患い、みにくかった。
妻は身分の低い出だった。
その彼女は、ナポレオン軍からゲーテの命を
救ったが、早逝した。

74歳になって、ゲーテは失恋する。
その時、あの「ダイナモン」が現れて
最後の急峻な峰へと向かわせた。

人類の平和の象徴、『ファウスト』はわれらが魂
のマッターホルンでありつづけるだろう。

「もう一つの真実」を読もう……『常識の落とし穴』へのご案内

広瀬 隆 『地球の落とし穴』(NHK 出版、1998 年)
『東京に原発を!』(集英社文庫、1986 年)



和歌山県や新潟県で発生した毒物混入事件は未だ全面的な解決には至っておりません。それどころか、類似的な事件が各地で頻発しており、当該地域住民の不安は高まるばかりです。そうした中、一部のマスコミはスクープを急ぐあまり、事件発生地区の住民を「疑惑の人物?」として特定したり、挙げ句の果てには、別人の写真を掲載するという決定的なミスまで犯してしまいました。

かつて、オウム真理教が引き起こした松本サリン事件では、被害者であり最初の通報者でもあった人が警察によって「疑惑の人物」に仕立て上げられ、マスコミも「真犯人?」扱いましたが、後に「誤認報道」として名誉の回復がはかられたことは記憶に新しいところです。一般に、刑事事件に関する報道は、警察発表を前提にした「作り手」側からの一方的な発信が多く、不特定多数の「受け手」側はマスコミ情報を「公正」「中立」的な存在として無意識的に受け入れてしまい、その客観性を吟味することなく、個々人の「常識」で勝手に咀嚼(そしゃく)しながら推理を膨らませていくということになりがちです。その結果、多くの人々がもつれた糸を解きほぐす名(迷)探偵になり、犯罪を告発する検察官の役回りを演ずるようになります。したがって、そこでは誤認逮捕の危険性を指摘し人権侵害の可能性を心配する弁護士の立場で状況を考えるということにはなかなか

できません。これは「常識の落とし穴」とでもいえるものです。

このような状況は刑事事件に限ったことではなく、社会的な出来事の大部分に当てはまるように思われます。アメリカ・スリーマイルアイランドや旧ソ連・チェルノブイリの原発事故を契機に『東京に原発を!』(集英社文庫、1986 年)でセンセーショナルな問題提起を行い、いわゆる「ヒロセタカシ現象」を巻き起こして反原発運動を啓蒙した広瀬隆は、最新の著書『地球の落とし穴』で、このような「常識の落とし穴」を歯に衣着せず語っています。例えば、昨年 8 月 31 日に発生したイギリス王室ダイアナ妃の死亡事故についてはこうである。ダイアナ妃の自動車事故の原因としては、ゴシップ追跡者「パパラッチ」へ非難が集中しているが、そのゴシップ記事をこれまでむさぼり読んできたのは誰か。エリザベス女王はダイアナ妃の死に対して冷たいというが、自分の息子をほったらかしにして他の男とベタベタし、心中同然の形で最期を遂げた嫁さんに思いやりを持つ姑がどこにいるものか。さらに、福祉施設の訪問や地雷廃止を訴えた生前の善行とダイアナ妃が所有した湖つきの大邸宅との格差、とんでもない貧富の差ではないか。特に指摘したいのは、死亡したダイアナ妃の相手の一族が、全世界の戦乱の影に暗躍する「死の商人」として欠かせない存在で、その商品の一つが地雷や武器であるとしたら、ダイアナ妃の善行はどう評価すべきなのか。

常識の落とし穴を考える題材は全部で 11 話用意され、これらの事実は欧米に実在する資料や文献によって綿密に組み立てられています。したがって、単なる暴露や内幕ものではなく、上品な話に仕上がっています。この辺りがへそ曲がりのあなたには向いているかも……? (K. K.)

北海学園大学附属図書館報 図書館だより Vol.20 No.8 (通巻 147 号)

本館 〒062-8605 札幌市豊平区旭町 4 丁目 1 番 40 号 工学部図書室 〒064-0926 札幌市中央区南 26 条西 11 丁目
☎(011) 841-1161 本館内線 270~275・279 工学部内線 813・814 印刷所: 懶アイワード